

○こんどこそ年内には出したいと思っていた第四号であったが、やはり年を越して年度末になってしまった。毎年十月以後は卒論指導に追われ、国文学会、文ゼミなどの行事や諸学会が輻湊するのであるから、九月中に原稿が上がらなければ、この悪慣例は改めることができないわけである。次号あたりからは必ず夏休み中に原稿を書き上げるよう、計画を立て、実行してほしい。

○それともう一つ、機関誌として望ましいことは、執筆者、論文のテーマの多様性ということである。そのためには会員の研究活動が盛んになり、多くの会員が執筆予備軍を形成するようにならねばならない。本学会は歴史は浅いが、会員は毎年増加して行くのであるから、それを将来の夢として待つのではなく、毎日の生活がそれを實現するための一歩一歩であってほしいと思う。幸いにして本号は、執筆者の顔ぶれにかなりの変化を見ることができた。

駒木君の論文は昭和四十二年度の修士論文の一部を書き改めたものであり、原田さんのは大学院古代前期特講のレポートで、昨年十二月に提出されたものである。後者は同じテーマを扱った私の「夷振歌の物語的背景」(『国語と国文学』昭和四十四年一月号所載)の不備を補うところ、さらに突っ込んだところもあるのので、合わせて読んでいただきたい。広川講師のは、研究室のこまごました雑用や卒業生・在学生の身上相談にも乗りながら、やっと間にあわせた論文で、出来栄えのほどが心配なようでもあり、楽しみなようでもある。黒沢君の研究ノートは、大学院研究会のために用意されたもの

の要旨、深江浩氏の論評は、本誌第一、二号所載の安永教授の「戦時下の文学」(一)(二)に対する論評で、日本文学協会京都支部の例会で発表されたのを、本誌のために原稿にしていたものだものである。今後は会員の仕事に対する相互批評もできるだけ盛んにし、適当なものは誌上に掲載して、在学生や卒業生の皆さんにも読んでもらえるようにしたいと思う。

○周知のように最近、大学問題が大きな社会問題となって、「現代における大学」とは何かを基本的に考え直さなければならぬ段階にきている。同志社大学も例外ではなく、困難な問題が山積しているわけで、新しい大学のビジョンを探求しつつ現実の問題に対応して行かねばならないが、しかしそのことに紛れて研究活動がプランクになってしまつては困るのである。各人それぞれの重荷を背負いながらも、研究・教育集団としての同志社国文学会のメンバーとしての連帯関係を、いっそう強いものにしてゆきたいものである。

(昭和四十四年一月二十日・土橋記)

お詫び

本誌第三号所載の論文「藤村『緑葉集』の問題」は、編集委員の不注意のため、山田晃氏に御迷惑をかけました。ここに謹んでお詫びいたします。

昭和四十三年十二月

編集委員会

(今後右の論文は本誌目録より削除いたします)

執筆者紹介

駒木 敏……………昭和四二年度大学院  
(修士課程)修了  
朱雀高校教諭

原田 敦子……………大学院(修士課程)  
在学

広川 勝美……………本学専任講師

小森 啓助……………本学教授

安永 武人……………本学教授

徳永 光次郎……………昭和三二年度卒業生  
桃山学院高校教諭

黒沢 幸三……………昭和四〇年度大学院  
(修士課程)修了  
奈良商業高校教諭

深江 浩……………北野高校教諭

(表紙題字 土橋 寛)

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んで御投稿下さい。枚数は四百字詰原稿用紙三十枚〜四十枚。第五号締切は九月末日厳守。ただし掲載論文の数には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任して下さい。

同志社国文学 第四号

昭和四十四年三月一日 印刷  
昭和四十四年三月五日 発行

編集者 同志社大学国文学会  
代表 土橋 寛

京都市上京区烏丸今出川  
発行所 同志社大学国文学会

振替 京都二七三七

京都市南区吉祥院池ノ内町一〇

印刷所 明文舎印刷株式会社